

非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

金

【海外】

1. 価格推移

10 月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz) :	1,318.65 (3 日)	1,251.75 (14 日)
国内建値(円/g) :	4,325(4、31 日)	4,203 (12 日)
為替相場(円/\$、TTS) :	102.40 (3 日)	106.20 (28 日)

10 月の海外金相場は 3 日に\$1,318.65/toz(トロイオンス)と下げ基調でスタート、4 日には為替市場でドルが主要通貨に対して上昇し、ドルの代替資産として逆の動きをしやすい金が売られたことで\$1,283.30 へ下落、本年 6 月以来 4 か月ぶりの\$1,300 台割れとなった。7 日発表の 9 月の米雇用統計は強弱入り交じる内容だったことから、金には売り買いが交錯してもみ合ったものの、上げ下げどちらか一方に傾くことはなかった。

初旬は\$1,300 台割れとなったが、中旬入り後は下げピッチが鈍り、\$1,250 近辺で小幅な値動きに留まった。米利上げ観測を背景としたドル高による売り圧力が存在する一方で、宝飾需要期を迎えたインドや中国の実需買いもあり、大きく動きにくい展開が続いた。上旬までにファンドの金売りが進み、膨らんでいた買越残がいったん解消された影響もあった。

下旬入り直後も一進一退の動きが続いたが、26 日には\$1,273.90 まで上昇し、5 日以来およそ 3 週ぶりの高値をつけた。10 月の米消費者信頼感指数が前月から低下し、米株式相場も下げるなど投資家心理がやや弱気に傾き、現物の裏付けがあり安全資産とされる金に買いが入ったからであった。またインドの宝飾品向け需要の増加も上昇要因となった。さらに月末には、米政治情勢の先行き不透明感によるドル安から\$1,274 水準まで反発し、やや強含み基調のなか越月した。

2. 為替相場推移

10 月の為替相場は 3 日に\$1=102.40 円(TTS 相場、以下同じ)と円が弱含みの展開でスタート、7 日までは初旬に発表された米経済指標が堅調な結果と受け止められて米年内利上げ観測が高まり、日米金利差の拡大を見込んだ円売り・ドル買いが優勢になったことから円が\$1=104 円水準へ続落した。7 日に 9 月の米雇用統計が発

表されたものの、その内容は雇用者数が市場予想ほど増えず、失業率も悪化し、力強さに欠けたものだったことから、欧米での為替市場では円相場は一時的に反発した。しかし、その影響は週明けまで及ぶことはなかった。

中旬入り後も、原油先物相場や日経平均株価の上昇を受けて運用リスクをとりやすくなった投資家から円売り・ドル買いが出たことで円軟調で推移、13日には\$1=105.58円をつけ、本年7月末以来の円安・ドル高水準となった。その後は\$1=104円台後半での小動きが続いたが、20日に欧州中央銀行(ECB)が定例理事会で金融政策の据え置きを決めたことで、ドル高が進み、円は\$1=105.18円と13日以来の円安・ドル高水準となった。24日以降も米国の年内利上げ観測などを背景に、主要通貨に対するドル買いの流れが強まったため、本年7月末以来の\$1=106円水準へ円が後退した。

しかし、28日に米大統領選の民主党候補ヒラリー・クリントン氏の私用メール問題が再燃し、米政治情勢の先行き不透明感が増すと一転してドル安が進み、31日には\$1=105.86円と円が反発して越月した。

対ユーロでは月初は円安基調だったが、中旬以降は再び€1=114~115円へ円が上昇した。

【国内】

1. 建値推移

10月の国内金山元建値は3日に4,322円/g(グラム)でスタートし、その後は海外相場の続落基調から下落、5日に4,228円と本年1月以来の安値をつけると、12日には4,203円と4,200円際まで低下した。13日以降は概ね4,200円台前半での低位で安定していたが、月末に海外相場が反発すると、4,200円台後半での値動きとなった。31日には4,325円と月初並みの水準を回復して越月した。為替相場は月初円高基調だったが、それ以降はやや円安に向かいほぼ安定した動きとなったことで、ほとんど建値に影響を与えることがなく、10月は海外相場を反映した値動きとなった。

2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2016年9月分=平成28年9月分)

生産 : 9,173 kg (前月比 6.9%減、前年比 7.3%減)

出荷 : 9,782 kg (前月比 12.4%減、前年比 9.1%増)

在庫 : 4,140 kg (前月比 12.8%減、前年比 24.5%減)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

9月の生産は前月比、前年同月比とも2か月ぶりのマイナス。出荷は前月の反動から大幅減だが、前年同月比では2か月連続の増。在庫は生産減から前月比減、前年同月比も9か月ぶりの減。

銅

【海外】

2016年10月のLME銅相場は\$4,800/t水準から中旬いっぱいにかけて\$4,600圏へと弱含み推移したが、下旬に反発し、月末には\$4,800台を回復した。

米国経済は9月の非農業部門雇用者数が市場予想を下回り、伸び率は3か月連続で鈍化、失業率も前月の4.9%から5.0%と5か月ぶりに上昇した。住宅着工件数も前月比9%減と2か月連続の減少で2015年3月以来の低水準となった。一方、中古住宅販売件数は3.2%増と6月以来の大幅な伸びとなり、新築住宅販売件数も7月につけた9年ぶりの高水準に迫った。第3四半期GDP成長率は前期比2.9%と2014年第3四半期以来の高い伸びとなった。こうした状況下、9月20～21日の米連邦公開市場委員会(FOMC)の議事録では利上げに積極的な意見が増えていることが明らかになった。

中国経済は9月の輸出が6か月連続、輸入は2か月ぶりの前年割れとなった。一方、生産者物価指数は前年同月比0.1%プラスで2012年1月以来の上昇、8月の工業部門企業利益は前年同月比19.5%増と2013年8月以来の増加率、第3四半期GDP成長率は前年同期比6.7%増と3期連続の横ばいとなり、中国経済の一定の安定化が示唆された。

NYMEX原油相場は10月に入って石油輸出国機構(OPEC)の減産への思惑から6月以来の\$50/bbl.乗せとなったが、月末にかけて11月に予定される非加盟産油国との協議で協調減産が最終合意される可能性について悲観的な観測が浮上し、再び\$50を割り込んだ。

銅独自の要因として、LME銅在庫は8月後半から急増し、9月末には379千tと2013年12月以来の高水準に達したが、10月に入ると減少に転じ、28日現在321千tと急増前の水準に戻している。在庫の急増、急減の背景として大手トレーダー2社の在庫争奪戦が噂される。一方が倉庫会社の在庫誘導インセンティブを背景に中国の過剰在庫や委託製錬契約の返還分をLME倉庫に持ち込んでいるのに対し、もう一方は自社の減産分を補填すべくLME在庫を引き出しているといわれる。

供給障害要因としては、キャップストーンマイニングのコサミン銅銀鉱山(メキシコ)で10月10日、作業員1名が鉱山輸送車に轢かれて死亡した。このため、同鉱山の操業は停止されたが、翌11日再開された。

MMGのラスバンバス銅鉱山(ペルー)は10月17日、地元住民による道路封鎖のため精鉱輸送を停止した。同鉱山の精鉱はマタラニ港向け鉄道積換え地点までトラック輸送されており、14日、粉塵や騒音被害の地元住民と警官隊が衝突し、住民1名が死亡したことを受けて、17日、住民側が道路を封鎖した。24日、地元住民とペルー政府が対話のための協力枠組み協定に合意し、MMGは間もなく精鉱輸送を再

開した。

フリーポートマクモランのグラスベルグ銅鉱山(インドネシア)で9月28日、労働者約1千名が労働条件の改善やボーナスの公平な支給を要求してストライキを開始したが、10月8日、労使が合意し、ストは終結した。この間、オープンピット採掘が停止された。10月17日、労働者がブルドーザーに轢かれて1名が死亡、1名が負傷する事故が発生し、操業が停止されたが、翌18日に再開された。

OZミネラルズのプロミネントヒル銅金鉱山、BHPビリトンのオリンピックダム銅鉱山(豪)は9月28日、豪雪に伴う大規模停電の影響で操業を停止したが、10月13日、電力供給の復旧に伴い操業を再開した。

需給状況については、国際銅研究会によれば、2016年1~7月の世界の銅鉱石生産は前年同期比5.1%増11,546千t、地金生産は2.8%増の13,477千t、消費は4.3%増の13,741千t、この結果、地金需給バランスは前年同期の▲70千tから▲264千tへと供給不足幅が拡大した。報告在庫は10.4%減の1,347千t、在庫/消費比率は3.2週間から2.7週間に低下した。

鉱石生産の内訳は精鉱が6.5%増加、SXEWは1%減少した。国別には過去2年間に新規稼働と能力増強のあったペルーが47%増加したほか、カナダと米国が回復し、メキシコは能力増強により、モンゴルはオユトルゴイ鉱山の立ち上げにより増加した。しかしながら、チリは5%減少し、コンゴ民主共和国は減産により9%減少した。地域別にはアメリカが7%、アジアは8%増加したが、アフリカは4.5%減少し、ヨーロッパ、オセアニアは横ばいであった。鉱山稼働率は84.8%でほぼ横ばいとなった。

地金生産の内訳は一次生産が2.5%、二次生産が5%増加した。国別には中国が6%、米国は15%、メキシコは19%増加したが、コンゴ民主共和国とザンビアは減産のため減少した。地域別にはアメリカが6%、アジアは5%、オセアニアは8%増加、アフリカは14%、ヨーロッパは3%減少した。精製工場の稼働率は83.27%でほぼ横ばいとなった。

消費は中国の見掛け消費が9%増加した。ネット輸入が14%増加したことによるもの。中国のネット輸入は1~6月平均の312千tから7月は176千tと2013年4月以来の低水準にとどまった。中国を除く世界の消費は0.5%増加した。地域別にはヨーロッパが3.5%、アジアは6.5%増加(中国を除くアジアは1%増加)、アフリカは11%、アメリカは4.5%減少、オセアニアは横ばいであった。

今後の需給動向については、国際銅研究会によれば、2016年の世界の銅鉱石生産は前年比4.0%増の19,884千t、地金生産は2.2%増の23,383千t、消費は1.5%増の23,391千t、地金の需給バランスは▲8千tと前年の▲153千tから供給不足幅が縮小すると見込まれている。2017年は鉱石生産が横ばいの19,878千t、地金生産が1.7%増の23,791千t、消費は1.0%増の23,628千t、需給バランスは+163千tと供給

過剰に転じる予想。今年3月時点では2016年が▲55千t、2017年は+20千tと予想されたが、世界経済改善見通しを背景に生産、消費ともに上方修正された。

2016年の鉱石生産は過去2年間における鉱山の新增設に伴い増加する。精鉱生産は6%増加するが、SXEW生産は銅価低迷によるコンゴ民主共和国の減産、チリの閉山で3%減少する。2017年は既存鉱山の増産がSXEW鉱山の減産、新規鉱山プロジェクトの不足により横ばいにとどまる。国別には、2016年はペルー、メキシコ、2017年はチリが増産となる。

2016年の地金生産は電解生産が3%増加するが、SXEW生産は3%減少する。2017年はSXEW生産の減少により伸び率が鈍化する。2016年、2017年ともに中国が生産の増加を牽引する一方、チリはSXEW生産の減少により抑制される。

2016年の見掛け消費は1.5%の増加にとどまる。中国が実需は4%増加するが、見掛け消費は1.5%の増加にとどまることが主因。中国以外の消費は1.5%増加する。2017年の見掛け消費は1%増と伸び率が鈍化する。

International Copper Study Group
Copper Market Forecast 2015-2017

REGIONS (1000 t)	MINE PRODUCTION			REFINED PRODUCTION			REFINED USAGE		
	2015	2016	2017	2015	2016	2017	2015	2016	2017
Africa	1,896	1,829	1,901	1,384	1,222	1,250	258	233	227
N.America	2,708	2,880	2,885	1,906	2,043	2,046	2,317	2,312	2,353
Latin America	7,895	8,266	8,664	3,312	3,273	3,119	497	456	454
Asean-10/Oceania	1,906	2,119	2,272	979	1,063	1,160	953	1,060	1,096
Asia ex-Asean/CIS	2,376	2,449	2,474	11,110	11,664	12,092	14,845	15,109	15,189
Asia-CIS	618	677	738	398	420	433	103	103	103
EU	857	880	896	2,731	2,675	2,746	3,215	3,240	3,298
Europe Others	872	837	872	1,062	1,032	1,094	847	879	908
Total	19,128	19,936	20,702	22,883	22,393	23,940	23,035	23,391	23,628
World adjusted	19,128	19,884	19,876	22,883	23,383	23,791	23,035	23,391	23,628
% change	3.8	4.0	0.0	1.8	2.2	1.7	0.7	1.5	1.0
World Refined Balance							-153	-8	163
World Refined Balance Adjusted for Chinese Bonded Stocks Change							-256		

ICSG Oct.2016

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

9/15 530 10/6 540 10/14 530 11/1 550 11/7 560

2. 生産・出荷・在庫

平成28年9月の銅地金生産は前月比6.2%減、前年同月比5.1%増の126.6千tで前月比は2か月連続で減少したが、前年比は3か月連続の増加となった。出荷は前月比9.7%増、前年比5.3%増の137.3千tとともに3か月ぶりの増加となった。内訳は内販が前月比13.2%増、前年比6.7%増の76.4千t、輸出は60.9千tで前月比は5.5%増、前年比は3.5%増。内販のうち電線向けは前年比3.6%増の45.8千tと2か月連続の増加、伸銅品向けは7.4%増の24.7千tで4か月連続の増加。在庫は前

月比 9.1%減、前年比 1.2%減の 99.0 千tでそれぞれ 2 か月ぶりと 12 か月連続の減少となった。

3. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、平成 28 年 9 月の銅電線出荷は前月比 13.4%増、前年同月比 1.7%増の 60.4 千t(推定)と 2 か月連続の前年比増となった。うち内需は前年比 2.3%増の 58.8 千tで 2 か月連続の増加、輸出は 17.2%減の 1.6 千tで 2 か月連続の減少。内需の部門別には、自動車は 5 か月、その他内需が 3 か月、電気機械は 2 か月連続で増加したが、建設電販は 7 か月連続、通信は 3 か月ぶりに減少、電力も再び減少した。

日本伸銅協会によれば、平成 28 年 9 月の伸銅品生産は前月比 12.2%増、前年同月比 7.6%増の 67.7 千t(速報)と前年比は 5 か月連続の増加となった。うち内需向けは前年比 8.1%増の 56.8 千t、輸出は 5.1%増の 10.9 千tで 4 か月連続の増加。品種別には、半導体、コネクタ、自動車端子向けの銅条が 5 か月、自動車端子向けの黄銅条、エアコン向けの銅管は 2 か月連続の増加、コネクタ向けの青銅板条は 17 か月ぶりに増加に転じた。

4. 平成 28 年度銅電線需要改定見通し

日本電線工業会によれば、平成 28 年度の銅電線出荷は前年度比 1.6%減の 688.0 千tと 2 年連続で減少すると予想される。内訳は内需が 0.9%減の 671 千t、輸出は 22.4%減の 17 千t。部門別には、通信部門はメタルケーブルから光へのシフトに加え、設備投資も漸減傾向が続くことから減少する。電力部門は電力会社の設備投資抑制傾向が続くことから減少する。電気機械部門は増加する。用途別には、重電が電力小売り自由化の進展により新エネルギー向けの投資が堅調で増加する。家電は円高やインバウンド需要の減速により減少する。電子通信は円高やスマホ需要の弱含みのため減少する。電装品は国内自動車生産の減速が高機能化に相殺され微減となる。自動車部門は消費税増税前の駆け込み需要が見込めなくなったが、高機能化の進展により増加する。建設電販は首都圏大型案件や東京五輪に向けた需要が人手不足対策などによる工期延長が影響して減少する。その他内需は民間設備投資回復見込みから増加する。輸出は資源安、新興国経済減速の影響から減少する。

	平成26年度 実績	平成27年度実績			27/26 (%)	平成28年度見通し			28/27 (%)
		上期	下期	計		上期	下期	計	
通信	12.5	5.5	5.8	11.3	▲ 9.6	5.0	6.0	11.0	▲ 2.7
電力	56.3	29.3	30.3	59.6	5.9	28.0	30.0	58.0	▲ 2.7
電気機械	160.1	74.4	75.3	149.7	▲ 6.5	74.0	78.0	152.0	1.5
自動車	72.2	33.5	36.7	70.2	▲ 2.8	35.0	36.0	71.0	1.1
建設電販	340.1	163.6	174.5	338.1	▲ 0.6	155.0	175.0	330.0	▲ 2.4
その他内需	51.3	24.4	24.1	48.5	▲ 5.5	24.0	25.0	49.0	1.0
内需計	692.5	330.7	346.7	677.4	▲ 2.2	321.0	350.0	671.0	▲ 0.9
輸出	31.2	11.8	10.1	21.9	▲ 29.8	8.0	9.0	17.0	▲ 22.4
合計	723.7	342.5	356.8	699.3	▲ 3.4	329.0	359.0	688.0	▲ 1.6

(注)四捨五入による不突合あり
(出典)日本電線工業会

鉛

【海外】

2016年10月のLME鉛相場は2015年5月以来の高値となる\$2,000/t圏をもみ合い推移した。

米国経済は9月の非農業部門雇用者数の伸び率が3か月連続で鈍化、失業率も5か月ぶりに上昇、住宅着工件数は2か月連続の減少で2015年3月以来の低水準となった。一方、中古住宅販売件数は6月以来の大幅な伸びとなり、新築住宅販売件数も7月につけた9年ぶりの高水準に迫った。第3四半期GDP成長率は前期比2.9%と2014年第3四半期以来の高い伸びとなった。こうした状況下、9月の米連邦公開市場委員会(FOMC)の議事録では利上げに積極的な意見が増えていることが明らかになった。

中国経済は9月の輸出が6か月連続、輸入は2か月ぶりの前年割れとなった。一方、生産者物価指数は前年同月比0.1%プラスで2012年1月以来の上昇、8月の工業部門企業利益は同19.5%増と2013年8月以来の増加率、第3四半期GDP成長率は前年比6.7%増と3期連続の横ばいとなり、中国経済の一定の安定化が示唆された。

NYMEX原油相場は10月に入って石油輸出国機構(OPEC)の減産への思惑から6月以来の\$50/bbl.乗せとなったが、月末にかけては11月に予定される非加盟産油国との協議で協調減産が最終合意される可能性について悲観的な観測が浮上し再び\$50を割り込んだ。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2016年1~8月の世界の鉛鉱石生産は前年同期比5.7%減の2,999千t、地金生産は7,121千tで横ばい、消費も7,073千tで横ばいとなった。地金需給バランスは前年同期の▲29千tから+48千tへとほぼバランス推移した。

鉛石生産はヨーロッパが 2.1%、アフリカは 7.1%増加したが、アジアは 1.3%、アメリカは 2.1%、オセアニアは 34.1%減少した。地金生産はアジアが 1.1%、オセアニアは 4.8%増加したが、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカは横ばいとなった。消費はアメリカが 1.1%、ヨーロッパが 9.4%増加したが、アジアは 2.9%、アフリカは 4.2%、オセアニアは 8.3%減少した。8 月末の地金の報告在庫は前年同月比 3.2%増の 534 千t、在庫/消費比率は 2.4 週間から 2.6 週間へとほぼ横ばい。

中国は鉛石生産が 1,425 千tで横ばい、鉛精鉛輸入は 9.7%減の 500 千t、地金生産は 3.3%減の 2,835 千t、地金のネット輸出は 30 千tから 12 千tに減少、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は 5.4%減の 2,794 千tとなった。

今後の需給動向については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2016 年の世界の鉛鉛石生産は前年比 0.3%減の 4,751 千t、地金生産は 3.6%増の 11,359 千t、地金消費は 2.8%増の 11,336 千t、地金需給バランスは前年の▲44 千tから+42 千tへとほぼバランス推移すると予想される。2017 年は鉛石生産が 3.3%増の 4,909 千t、地金生産は 1.2%増の 11,359 千t、地金消費は 1.3%増の 11,336 千t、地金需給バランスは+23 千tと引き続きバランス推移する予想。

2016 年の鉛石生産は中国が 9.7%増加するが、中国以外、とくにオーストラリア、インド、メキシコ、米国の減少で相殺される。2017 年は増加に転じる。

2016 年の地金生産は中国が増加するほか、2015 年 11 月にコリアジnkの蔚山製錬所(能力 130 千 t/年)が稼働した韓国が増加する。韓国は中国、米国に次ぎ世界第 3 位の鉛地金生産国になった。2017 年はベルギー、中国、メキシコのほか、アクアメタルズのネバダ電気化学精製プラントが間もなく稼働する米国が増加する。

中国の地金消費は e-バイク向け鉛バッテリー需要の減退が自動車分野の成長に相殺される。e-バイクはリチウムイオン電池需要が増加している。中国の鉛需要は 2016 年が 2.5%、2017 年は 1.1%増加する。ヨーロッパの鉛消費について 2015 年は減少したが、2016 年は自動車分野に支えられ 5.3%増加する。しかしながら、2017 年は横ばいにとどまる。米国の鉛消費は、国際バッテリー協議会(BCI)によれば、バッテリー出荷が新車用、取替用ともに僅かに増加しており、2016 年、2017 年ともに 1.9 増加する。

International Lead & Zinc Study Group
LEAD : World Production and Usage 2013-2016 (1000t)

	2014 Actual	2015 Actual	2016 Easimate	2017 Forecast	% Change 16/15	% Change 17/16
Mine Production	4,929	4,766	4,751	4,909	-0.3	3.3
Europe	428	414	410	419	-1.0	2.2
Africa	85	96	97	97	1.0	0.0
United States	379	367	335	325	-8.7	-3.0
Other America	677	717	706	755	-1.5	6.9
Cina	2,301	2,150	2,390	2,480	11.2	3.8
Other Asia	331	368	340	363	-7.6	6.8
Oceania	728	654	473	470	-27.7	-0.6
Refined Production	10,959	10,839	11,229	11,359	3.6	1.2
Primary	4,685	4,547				
Secondary	6,274	6,292				
Europe	1,850	1,912	1,903	1,927	-0.5	1.3
Africa	102	99	98	98	-1.0	0.0
United States	1,128	1,050	1,070	1,100	1.9	2.8
Other America	1,026	955	952	966	-0.3	1.5
Cina	4,704	4,700	4,850	4,900	3.2	1.0
Other Asia	1,923	1,920	2,126	2,138	10.7	0.6
Oceania	226	203	230	230	13.3	0.0
Refined Usage	10,950	10,883	11,187	11,336	2.8	1.3
Europe	1,720	1,691	1,780	1,784	5.3	0.2
Africa	96	105	100	102	-4.8	2.0
United States	1,671	1,540	1,570	1,600	1.9	1.9
Other America	623	628	653	664	4.0	1.7
Cina	4,709	4,710	4,830	4,885	2.5	1.1
Other Asia	2,114	2,193	2,237	2,284	2.0	2.1
Oceania	17	16	17	17	6.3	0.0
Statistical Balance	9	-44	42	23		
Reputed Metal Stocks	586	475				

ILZSG Oct.2016

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

9/1 253 9/5 260 9/13 249 10/3 270 10/18 265 11/1 274

10月はLME鉛相場が月央にかけて低下したことから、鉛建値は中旬に265千円/tまで下落した。

2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2016年9月分=平成28年9月分)

生産 : 16,439t (前月比 4.3%減、前年比 5.9%増)

出荷 : 17,130t (前月比 7.5%増、前年比 6.0%増)

在庫 : 24,393t (前月比 5.3%減、前年比 15.5%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

9月の生産は神岡製錬所の定修から前月比3か月ぶりの減だが、前年同月比は2か月連続の増。出荷は蓄電池向け販売の上昇から前月比大幅増、前年同月比も2か月連続の増と回復基調を辿っている。在庫は出荷増から前月比3か月ぶりの減、前年同月比も12か月連続の減。

3. 需要部門動向

9月の自動車生産台数は前年同月比1.4%増の840,891台となり、2か月連続で前年同月を上回った。

乗用車は前年同月比2か月連続のプラス、トラックは同2か月ぶりのマイナス、バスは同9か月連続のプラスとなった。

9月の自動車輸出台数は前年同月比3.8%増の435,028台となり、2か月連続で前年同月を上回った。

一方、9月の二輪車生産台数は前年同月比3.3%減の43,741台と5か月連続で前年同月を下回った。

(一社)電池工業会の調査によると、8月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で1,769千個(前年同月比4%増)と3か月ぶりに上昇、自動車用以外の鉛蓄電池も553千個(同3%増)と再び増加した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで2,322千個(同4%増)と5か月ぶりに上昇した。

鉛関連製品生産統計

		8月	9月(速報値)
自動車	数量(台)	658,511	840,891
	前年同月比(%)	108.8	101.4
		7月	8月
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	15,342	12,982
	前年同月比(%)	91.0	101.8

(出所:(一社)日本自動車工業会、経済産業省生産動態統計調査)

亜鉛

【海外】

2016年10月のLME亜鉛相場は\$2,200~2,400/t圏を堅調に推移した。

米国経済は9月の非農業部門雇用者数の伸び率が3か月連続で鈍化、失業率も5か月ぶりに上昇、住宅着工件数は2か月連続の減少で2015年3月以来の低水準

となった。一方、中古住宅販売件数は 6 月以来の大幅な伸びとなり、新築住宅販売件数も 7 月につけた 9 年ぶりの高水準に迫った。第 3 四半期 GDP 成長率は前期比 2.9%と 2014 年第 3 四半期以来の高い伸びとなった。こうした状況下、9 月の米連邦公開市場委員会(FOMC)の議事録では利上げに積極的な意見が増えていることが明らかになった。

中国経済は 9 月の輸出が 6 か月連続、輸入は 2 か月ぶりの前年割れとなった。一方、生産者物価指数は前年同月比 0.1%プラスで 2012 年 1 月以来の上昇、8 月の工業部門企業利益は同 19.5%増と 2013 年 8 月以来の増加率、第 3 四半期 GDP 成長率は前年比 6.7%増と 3 期連続の横ばいとなり、中国経済の一定の安定化が示唆された。

NYMEX 原油相場は 10 月に入って石油輸出国機構(OPEC)の減産への思惑から 6 月以来の\$50/bbl.乗せとなったが、月末にかけては 11 月に予定される非加盟産油国との協議で協調減産が最終合意される可能性について悲観的な観測が浮上し再び\$50 を割り込んだ。

供給障害要因としては、グレンコアは 10 月 31 日、マウントアイザ鉱山群のブラックスター露天採掘鉱山(豪)の操業を休止したと発表した。採掘可能な埋蔵量が枯渇したことによるもの。マウントアイザ鉱山は長期間の採掘活動により地下坑道が縦横に張り巡らされているため、2004 年にブラックスター鉱山の採掘が開始された。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2016 年 1~8 月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比 6.2%減の 8,519 千t、地金生産は 3.6%減の 8,924 千t、消費は 9,105 千tで横ばい、地金需給バランスは前年同期の+205 千tから▲181 へと供給不足に転じた。

鉱石生産はアジアが 1.4%、アフリカは 3.9%増加したが、アメリカは 1.8%、ヨーロッパは 1.6%、オセアニアは 51.2%減少した。地金生産はアフリカが 20.0%増加したが、アジアは 4.0%、ヨーロッパは 2.6%、アメリカは 4.5%、オセアニアは 3.2%減少した。消費はアジアが 2.8%、ヨーロッパは 2.1%、オセアニアは 21.1%増加したが、アメリカは 14.2%、アフリカは 2.8%減少した。8 月末の地金の報告在庫は前年同月比 4.7%減の 1,456 千t、在庫/消費比率は 5.6 週間から 5.5 週間へとほぼ横ばい推移した。

中国は鉱石生産が 9.1%増の 3,624 千t、亜鉛精鉱輸入は 39.9%減の 514 千t、地金生産は 4,053 千tで横ばい、地金のネット輸入は 78.2%増の 319 千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は 4.9%増の 4,382 千tとなった。

今後の需給動向については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2016 年の世界の亜鉛鉱石生産は前年比 5.6%減の 12,467 千t、地金生産は 2.9%増の 13,219 千t、地金消費は 0.6%増の 13,568 千t、地金需給バランスは前年の+166 千tから▲349 千tの供

給不足に転じると予想されている。2017年は鉱石生産が5.9%増の13,201千t、地金生産は2.9%増の13,599千t、地金消費は2.1%増の13,847千t、地金需給バランスは▲248千tと引き続き供給不足となる。

2016年の鉱石生産は中国以外が鉱山閉鎖や減産により11.7%減少するが、2017年は一部回復する。2016年はオーストラリア、インド、アイルランド、ペルーが大幅に減少する。オーストラリアは2015年末にMMGのセンチュリー鉱山が閉鎖されたほか、グレンコアが減産となる。インドはヒンダスタンジnkのアグチャ鉱山が減産となる。アイルランドは2015年にリシーン鉱山が閉鎖された。ペルーはアンタミナ、イスカイクルス鉱山が減産となる。2017年はオーストラリア、インド、ペルーの生産が回復し、中国、カザフスタン、メキシコ、ロシアが増加する。また、ネブサンリソーシズのビシャ鉱山が最近生産を開始したエリトリアも本格稼働する。中国の精鉱輸入は2015年の1.37百万tから大幅に減少する。

2016年の地金生産はアルゼンチン、オーストラリア、ベルギー、インド、メキシコ、米国が減少する。2017年はオーストラリア、インド、メキシコの生産が回復する。

中国の地金消費は自動車分野の需要増がめっき鋼板輸出の減少に部分的に相殺され、2016年は1.8%、2017年は1.3%の増加にとどまる。ヨーロッパの地金消費は過去4年間横ばい推移したが、2016年も0.7%増、2017年は0.5%増にとどまる。米国の見掛け消費は2016年が在庫調整の影響で8.7%減少するが、2017年は回復し11.8%増加する。

International Lead & Zinc Study Group
ZINC: World Production and Usage 2013-2016 (1000t)

	2014 Actual	2015 Actual	2016 Estimate	2017 Forecasts	% Change 16/15	% Change 17/16
Mine Production	13,525	13,202	12,467	13,201	-5.6	5.9
Europe	988	961	969	1002	0.8	3.4
Africa	331	313	361	392	15.3	8.6
Peru	1,319	1,422	1,300	1440	-8.6	10.8
Other America	2,594	2,534	2,495	2491	-1.5	-0.2
Cina	5,065	4,670	4,930	5170	5.6	4.9
Other Asia	1,662	1,724	1,448	1590	-16.0	9.8
Oceania	1,566	1,578	964	1116	-38.9	15.8
Refined Production	13,486	13,650	13,219	13,599	-3.2	2.9
Primary	12,664	833				
Secondary	822	13,650				
Europe	2,452	2,471	2,426	2,445	-1.8	0.8
Africa	127	79	119	106	50.6	-10.9
Canada	648	683	680	680	-0.4	0.0
Other America	1,111	1,095	988	1,038	-9.8	5.1
Cina	5,807	5,860	5,800	6,000	-1.0	3.4
Other Asia	2,853	2,973	2,750	2,844	-7.5	3.4
Oceania	488	489	456	486	-6.7	6.6
Refined Usage	13,734	13,484	13,568	13,847	0.6	2.1
Europe	2,349	2,413	2,430	2441	0.7	0.5
Africa	148	172	160	163	-7.0	1.9
United States	966	931	850	950	-8.7	11.8
Other America	782	756	713	741	-5.7	3.9
Cina	6,401	6,190	6,300	6380	1.8	1.3
Other Asia	2,909	2,883	2,928	2980	1.6	1.8
Oceania	179	139	187	192	34.5	2.7
Statistical Balance	-248	166	-349	-248		
Reported Metal Stocks	1,566	1,465				

ILZSG Oct.2016

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

9/1 289 9/6 292 9/9 283 9/14 277 9/21 283 9/27 277

10/3 289 10/11 286 10/14 280 10/20 286 10/26 292 11/1 304

10月はLME 亜鉛相場が月央にかけて低下したことから、亜鉛建値は中旬に280千円/tまで下落したが、その後は反発した。

2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2016年9月分=平成28年9月分)

生産 : 40,638t (前月比 9.7%増、前年比 5.4%減)

出荷 : 44,832t (前月比 3.8%増、前年比 6.9%減)

在庫 : 72,560t (前月比 5.4%減、前年比 1.0%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鋳業協会受払)

9月の生産は飯島製錬所の定修明けにより前月比増だが、前年同月比は複数の製錬所の生産減から14か月連続の減。出荷は亜鉛めっき鋼板向けが減少するも、それ以外の需要分野向けが増加して前月比増となったが、前年同月比は11か月連続の減。期待された亜鉛めっき鋼板も失速し、他鋳種と比べても停滞感が否めず。在庫は出荷増から3か月連続の前月比減だが、前年同月比は再び増。

3. 需要部門動向

9月の鋳工業生産指数は前月比±0.0%、前年同月比0.9%増の97.8(季節調整済、2010年=100基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は横ばい、前年同月比は2か月連続のプラス。はん用・生産用・業務用機械工業と輸送機械工業が上昇したが、情報通信機械工業や電子部品・デバイス工業が低下した。経産省は生産の基調判断を「緩やかな持ち直しの動き」に据え置いた。

7~9月期は97.4と前期を1.1%上回った。上昇は2四半期連続。自動車と電子部品がけん引した。

9月の業種別生産指数で前月の生産水準を上回ったのは、全15業種中7業種。輸送機械は前月比2.6%増だった。8月に法人需要で大きく伸びたパソコンを含む情報通信機械は同11.8%、電子部品・デバイスは同2.7%それぞれ低下した。

9月の出荷指数は前月比1.1%増の95.7と2か月ぶりにプラスとなったが、前年同月比は0.1%減と2か月ぶりにマイナスとなった。

一方、在庫指数は前月比0.4%減の111.0と微減。在庫率指数は前月比1.5%増の110.0と2か月ぶりに上昇した。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、10月が前月比1.1%の上昇、11月は同2.1%の上昇を見込んでいる。

8月の亜鉛めっき鋼板生産(次工程用消費を除く)は前年同月比26か月連続の減と依然低迷。数量も23か月連続の100万t台割れ。

8月の伸銅品生産量は60,360t(確報値、対前年同月比+10.7%)(対前月比▲8.4%)、2016年(平成28年)5月から4か月連続の対前年同月比プラス、増加幅は二桁に拡大した(7月+0.3%、8月+10.7%)。主要品種の全てが二桁増となった。内需向けは50,216tと2か月振りに対前年比プラス(+10.5%)、輸出向けは10,144tと3か月連続の対前年比プラス(+11.7%)。銅条は4か月連続の対前年比プラスで増加幅を二桁に拡大、銅管は2か月振りにプラス、黄銅棒は14,634tと4か月連続のプラスとなった。8月としては2011年(平成23年)(15,252t)以来となる高水準だった。黄銅条は7,457tと対前年比は2か月振りのプラス(+12.6%)。

亜鉛関連製品生産統計

		7月	8月
亜鉛めっき鋼板	数量(t)	884,350	855,504
	前年同月比(%)	93.8	98.6
黄銅製品	数量(t)	27,551	25,880
	前年同月比(%)	98.9	110.5
亜鉛ダイカスト	数量(t)	1,576	1,382
	前年同月比(%)	84.5	94.5
亜鉛華	数量(t)	5,780	3,827
	前年同月比(%)	101.6	114.3

(出所:経済産業省生産動態統計調査)